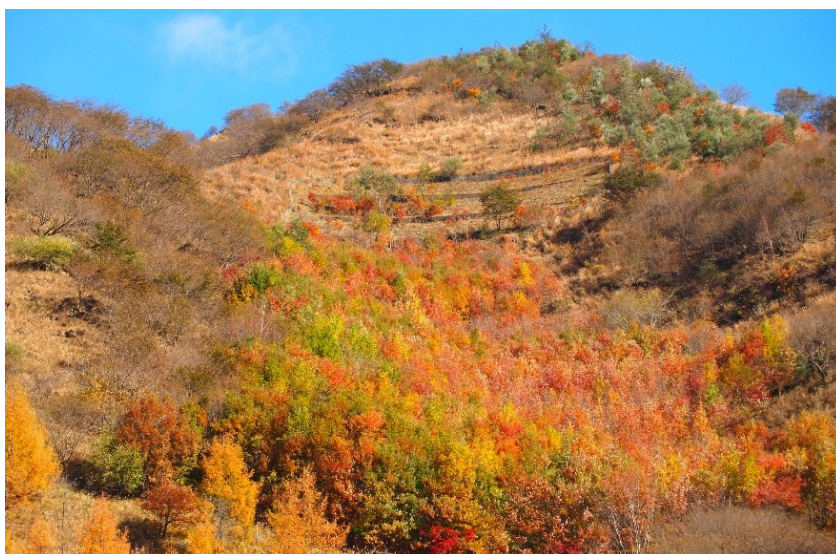


森の木魂（こだま）

令和3年1月24日発行 創刊号



・『森の木魂(こだま)』創刊によせて……………	1	・みちくさのご案内……………	6
・2021年の森づくり……………	2	・ファンクラブ通信……………	7
・2021年事業のあらまし……………	3	・森はともだち……………	8
・役員紹介……………	5	・編集後記……………	8



昨年秋の足尾
「白沢の森」

『森の木魂(こだま)』創刊によせて

これまでの『森びと通信』は臨場感あふれる国内外の現場の生の声を届けてきました。森をつくるのは大変な作業であるにも関わらず、汗をかいて輝く人々の躍動感、はじける汗と会話。その一体感が手に取るように文章からあふれ出ていました。

楽しいこと、作業の大変なこと、人の営み、自然の移ろい、野生動物の登場など、自然と人のつながりが森をつくる過程で見え隠れする読んで楽しい通信でした。また、各県で行われている森づくりと人づくりの活動の報告書でもありました。

私がNPO法人森びとプロジェクト委員会の理事長になった時に頂いた通信を楽しく読み、ああ、このような活動をしているのかと、現場の暑さや寒さまで感じられた感覚を覚えています。その上、森びとはなぜ活動するのか、地球温暖化による気候変動は人間が解決しなければならない喫緊の課題である

ことを強く打ち出して、やることはやる、言うことは言うという取り組みが紙面の隅々まで行き渡っていました。森づくりという活動による取り組みと行政府や社会を啓発していく取り組み、読んで楽しい森びと通信には強い思想も込められていました。

NPO法人森びとプロジェクト委員会が解散する時、森びと通信は廃刊になってしまうのだろうかという危惧は当然ありました。でもそれは杞憂でした。新生森びと通信『森の木魂（こだま）』の巻頭の言葉を頼まれた時、その精神と広報活動は続くのだと受け止め、素直に良かったと思っています。

これから本格的に始まる森びとプロジェクトの活動が『森の木魂（こだま）』に記録として残っていくのです。皆様と共にその門出を祝いたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

運営委員会代表 中村 幸人

2021年の森づくり

世界の人々が木を植えて森と生きる社会を



足尾・中倉山の「無言の語り木」(ブナ)

会員の皆様、明けましておめでとうございます。皆様にとっての2021年はどんな年を描いていますか。「森びとプロジェクト」運営委員会の今年は、地球上のすべての生命にとって欠くことのできない“いのちの森”をつくる活動を継続し、少しでも地球温暖化にブレーキをかけていきたいと思えます。

この活動の先には、有限な自然資源の価値を最大限に生かし、原発や化石燃料に頼らない希望の暮らしを描いています。この過程では、多くの方々との出会いを大切にして、自然環境と人間の生命を大切にする心を育み合い、そのための心をひとつにしていきたいと願っています。

昨年10月3日、新生「森びとプロジェクト」はその活動を始めました。活動フィールドはこれまで通り、栃木県日光市足尾町旧松木村跡地の森、岩手県八幡平市旧松尾鉦山跡地の森、福島県南相馬市の森の防潮堤、仙台市荒浜と名取市の森の防潮堤が中心となりますが、今年からは森びと県ファンクラブの皆さんとその仲間達が、各地域で活動をはじめます。その紹介は、7ページをご覧ください。どうぞよろしくお願ひします。

誰も経験したことのない地球温暖化による想定外の異常気象が続く今、世界中の人々は不安な日々を過ごしています。想定外の大雨による洪水、土砂崩れ、気温上昇による干ばつや山火事、森林火災などが世界各地で起きています。

人間の営みは自然界の循環と無関係ではありません。命を育む土台である地球を、私たちは生物社会のひとりとして、この循環とバランスを壊してはなりません。しかし人間の暮らしや経済活動は、有限の自然資源と自然界の力を衰弱させてきました。今後90億人を超える世界の人々がこの地球上で生きていくには、温室効果ガスの排出量を減らすとともに、植物による二酸化炭素の吸収とのバランスを上手にとっていく社会と暮らしが前提になるのでしょうか。

一人ひとりの力は小さいかもしれませんが、また、長い時間がかかる活動になるかもしれません。皆様のお知恵もお借りし、国や地方行政だけでなく経済界に私たちの意見を届け、また、一本でも多くの木を植え続けていきたいと考えています。多くの方々にその仲間になっていただくことを改めて呼びかけます。

運営委員会副代表 清水 卓

2021年事業のあらまし

今年も人と心に木を植え続けます！

2021年の事業をすすめるにあたって、その基本的な考え方を紹介します。これらの事業の詳細は、運営委員会で審議し、意思統一した事業の準備をすすめて、会員やボランティアにその協力を呼びかけていきます。



足尾にてボランティアスタッフのみなさんと

あなたに代わってスタッフが木を植える〈代行植樹〉

里親森づくり

栃木県日光市足尾町の荒廃地に木を植えることは大変な時間と出費がかかります。そこで「現地の訪問は難しいけれど木を植えたい」という要望にお応えし、足尾スタッフ、サポーターが希望者に代わって足尾に木を植えられるようにします。名称を「里親森づくり」とします。

新型コロナウイルス感染症の収束はいまだ見通せませんが、全ての生き物たちの生存基盤の衰弱は、人間の都合を待ってくれません。この現状に向き合っていかななくてはならない環境下でも、森を育てていかなければと思います。里親植樹の概要は次に記載する通りとし、詳しくは森びとウェブサイトでお知らせします。

○植樹期間

5月から10月の半年間、月一回とします。

○告知と受付

植林日をホームページ等で事前にお知らせします。

○植える樹木

植える本数の制限はありませんが、1回に植える数は100本程とします。樹種の選定は原則森びとプロジェクトが行います。

○費用

苗木1本を植える場合は苗木代、黒土と腐葉土消耗品代1,000円をお振り込み頂きます。

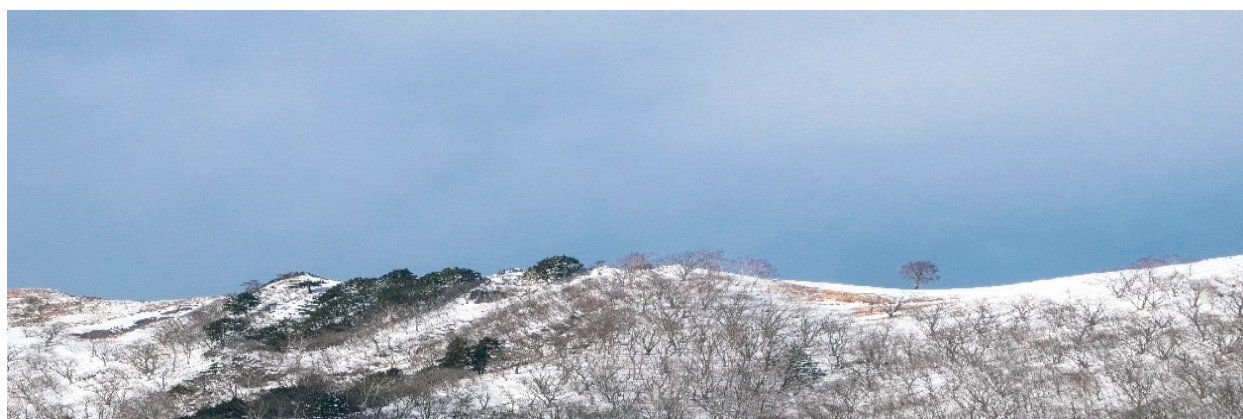
○植えた樹木の確認方法

植えた苗木の様子や木々の成長は森びとプロジェクトのウェブサイトを確認できるようにします。



土砂を流さない森へブラッシュアップ

足尾・松木沢の森は栃木県から「土砂流出防備保護林」として管理されています。その一角で育てている「白沢の森」を、大雨による土砂流出を防ぐ森へ磨きあげます。栃木県のアドバイスを受けながら、「白沢の森」内の一角を区切って除伐し、太陽の陽を入れます。また、根の調査を行います。



冬景色の中倉山

地球温暖化にブレーキをかける

★国有地、県管理の民有地での森づくりを国や県に要望していきます。

市民の森づくり活動だけでは地球温暖化にブレーキをかけていくことは微力です。日本の全ての空き地に木を植えても温暖化を防止することは無理かもしれません。それでも私たちは、“山と心に木を植える”活動をすすめていきます。八幡平市と日光市足尾町の森づくりの実績を基に、国有林と県管理地に市民参加の森づくりを要望していきます。

候補地は、八幡平市の松尾鉦山跡地（国有地）、日光市足尾町の県管理地とし、栃木県と林野庁へ要望書を提出します。行政と市民による森づくりを実現させたいと願っています。

★**县市町村議会での原発に頼らない「2050年温室効果ガス排出ゼロ」実現決議を县市町村議会の採択を求めています。**

菅義偉首相は2050年までに温室効果ガス排出を実質ゼロにする宣言をしました。宣言の内容では、原発をベースロード(基幹)電源に位置付けています。私たちは、「有限な自然資源の価値を最大限に生かし、原発に頼らない温室効果ガス排出ゼロを実

現する」決議を各縣市町村議会で求めています。この活動は、森びと各県ファンクラブと連携を図り、賛同する議員に呼びかけていくものとします。



3.11から10年を振り返る

2021年3月11日は、東日本大震災・フクシマ原発事故から10年です。私たちは、福島県南相馬市で津波から人命を守る森を育てている市民を応援しています。今年は、この森を観察し、森に寄り添う暮らしの大切さと原発の恐ろしさを忘れず、その心をより一層豊かにできればと願っています。

南相馬市民の電力は70%が再生エネルギーで賄っています。「脱原発都市宣言」の市民の声を全国へ届けていければと思います。森の防潮堤づくり市民応援隊と連携して、その願いを実現していきます。(副代表 清水 卓)

役員紹介

これからもよろしくお願いします。

新生「森びとプロジェクト」の役員、森びとの仲間達を紹介します。新生「森びとプロジェクト」の役員の多くは、前身の「NPO 法人森びとプロジェクト委員会」の理事がこの組織と事業を運営しています。

事業は、年一回の総会で正会員の審議を経て決定されます。その執行は運営委員会が行います。委員会はその都度、代表が招集し、事業の具体化を意思統一し、委員会内に設置したチームが事業をすすめていきます。

【運営委員会】

★顧問

宮脇 昭(横浜国大名誉教授)

★アドバイザー

山崎 誠(衆議院議員)

倉澤治雄(科学ジャーナリスト)

川端省三(元林野庁職員)

島野智之(法政大教授)

★役員

代表：中村幸人(東京農業大名誉教授)

副代表：清水 卓(会社員)

運営委員：井上 康(元林野庁職員)

運営委員：大野昭彦(植林ボランティア)

運営委員：小林 敬(会社員)

運営委員：小黑伸也(会社員)

運営委員：太宰初夏(会社員)

★会計監査員

高橋よし子(無職)

小黑久美子(会社員)

以上、敬称略

運営委員会の中には下記のチームが設置され、事業をすすめていきます。

森づくりチーム

- ・キャプテン：井上 康、大野昭彦
- ・足尾スタッフ(3名) + サポーター
- ・森の防潮堤スタッフ(2名) + サポーター

事務広報チーム

- ・事務キャプテン：小林 敬
- ・事務スタッフ(1名) + サポーター
- ・広報キャプテン：小黑伸也、太宰初夏
- ・広報スタッフ(1名) + サポーター

以上の布陣で、新生「森びとプロジェクト」は“山と心に木を植える”を合言葉にして、森づくり活動をすすめていきます。会員の皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

ひとこと紹介

メンバーの自己紹介コーナーです。
今回は森のプロフェッショナル、川端さんと井上さんです。

- 1957年東京都生まれ。林野庁に就職し、東京霞が関の本庁のほか、秋田、北海道、長野、九州などで現場を経験。JICA 専門家としてタイ王国で2年間、焼畑跡荒廃地の植林技術協力にも従事。2004年日光森林管理署勤務時に森びとと出会い、2016年林野庁退職後の現在まで、森びと創設期からの長いお付き合い。森びと達の足尾や八幡平での森づくりの思いが一人でも多くの人の心に届くよう、引続き頑張りましょう。(アドバイザー・川端省三)
- 長野在住 63歳無職。これという特徴はありませんが、日本全国18の街に暮らしてきました。住んだ順に並べると、横浜、相模原、府中、帯広、標茶、川崎、宮崎、名古屋、千葉、奈良、札幌、北見、日高、安芸、山形、高知、日光、長野。平均すると1カ所3年半ですか、寅さんのようでもありますね。皆様と森づくりの楽しみを分かち合えたらいいなと思います。人類の祖先は森で生まれたのでしょうから、そこはすべての人の故郷です。(運営委員 井上 康)

みちくさのご案内

ぜひお立ち寄りください。

足尾・松木溪谷入口に設置している出会いの場。名称は「遊働楽舎」、愛称名は「みちくさ」、この出会いと憩いの場がオープンしてから今年5月で10年を迎えます。



足尾グランドキャニオンにアタックするロッククライマー、松木溪谷の沢でアイスクライミングをするクライマー、そして松木溪谷を訪れる訪問者との出会いを楽しみにしているのが「みちくさ」を交代で管理している森びとの「舎人」です。

私たちは、海外の方々を含めて、年間に100名以上の方々との出会いと楽しいひと時を過ごしています。オープンは4月から11月までの土日祝祭日、去年は新型コロナウイルス感染症の影響で限られたオープンとなりました。



「みちくさ」の舎人は1日2人です。朝9時、1人は室内の掃除とお湯を沸かし、もう一人は放射能線量測定と気温測定を行います。その後、一休みして、訪問者との出会いを待ちます。舎人は訪問者にお茶を振る舞い、森づくりの話や足尾の自然の話を用意しています。

「みちくさ」での出会いはその都度、ホームページで紹介しています。足尾の新しい魅力を発見しながら、それらのことを未来の財産にしていきたいと願っています。

足尾・松木沢の魅力を発見出会い

「遊働楽舎」（愛称名：みちくさ）設置10年を契機に、今年から新メニューを試行していきます。

子供たちからシニアまでが気軽に立ち寄り、桜の木陰で気持ちを休めるテーブルとベンチの整備、時には、希望者に森を案内(無料)できる環境を整えます。



訪問者からの希望を募り、15年間育てている森を案内(無料)をできるようにします。また、「みちくさ」室内の閲覧資料を分かり易く整理し、竹細工体験、リース作り体験等を試みます。

ファンクラブ通信

森びと県ファンクラブの紹介です。



東日本管内では、森びとインストラクターが中心になって森びとファンクラブを結成していました。現在、そのクラブを新生森びとプロジェクトのファンクラブとして再編成しています。県ファンクラブは、今年も1都9県での森づくり、地球温暖化にブレーキをかける活動を計画しています。

❶ 県市町村議会の決議を政府へ届けたい

菅首相は昨年10月、「温室ガス2050年実質ゼロ」宣言をしました。内実は、原発をベースロード電源に位置付けていますので、私たちは原発に頼らずに2050年排出実質ゼロを政府へ要請していきます。この要請は、都県市町村議会で決議していただき、住民の総意として政府へ届けていければと考え

ています。具体的には、県ファンクラブが県市町村議員への働きかけを行っていきます。

❷ 脱原発都市宣言の心を暮らしへ活かす

今年は、東日本大震災・福島原発事故から10年目です。森びと福島県ファンクラブは、応援隊の皆さんと連携して、原発事故と津波の脅威を風化させない市民の集い、市民が育ててきた「いのちを守る森の防潮堤」の散策を通じて、森の大切さと暮らしについて語り合いたいと思います。

今年も、森びと県ファンクラブと共に、各地で森づくり活動をすすめませんか。

森は友だち

2020年11月末、足尾銅山跡地に木を植えて小さな森をつくったシニアスタッフから次世代へ、“山と心に木を植える”運動をバトンタッチすることができた。その日は、シニアのひとりとして忘れてはならない日になり、語り合えたひと時がとても嬉しかった。

その晩、この小さな森を、全ての生きものの命が育まれる森に育てようと、限られた時間の人生を楽しむことに決めた。植物に依存しなければ生存できない人間の一人として、森と無縁であったことの自戒の念をもって足尾の森を元気にすると、布団の中で誓った。

森づくり活動で培った森と向き合う暮らしの術は、永遠に遺していかなければならないと思う。何気なく、自由に、無料で空気を吸い、ミネラル豊富な自然水を飲めることが当たり前になっている日常。コロナ禍は、この日常が通用しないことを改めて私たちに突き付けてきた。さらに、想定外の異常気象の脅威は、この「日常」を揺す振ってくるだろう。

これからもこの地球上で生きていくためには、森に寄り添って暮らす心得や心構え、自然界の掟などを私たちは、暮らしに受け入れなければならない。生物社会から隔離された人間社会は実在できないことを、私は森づくりで学んだ。

この欄（「森は友だち」）では、森づくりで培った森のメッセージを紹介していきたい。

この時季、足尾の朝は寒い。凍てつく寒風が吹きつける足尾の小さな森の木々の様子を覗いていると、全ての生きものたちの営みを支える「我慢」の重さが伝わってくる。暮らしには、その恵みに感謝する恩返しを忘れてはならない。（広報スタッフ・高橋佳夫）

編集 後記

「森びとプロジェクト」会報誌の発刊にあたり、まずはスタッフのみなさんに感謝したいと思います。初めての編集ということで、試行錯誤を重ねてようやく送り出すことができました。至らぬところだらけなのかなと思いますので、紙面に対する忌憚ないご意見を頂戴頂ければ嬉しいです。たくさんの方が参加できる楽しい紙面にしていきたいと考えており、会員全員で育てていけるようなそんな仕組みにしていきたいです。ということで、投稿や紙面に対するアイデア、企画、作業員(笑)など、大募集します！（楽しようとしている？と突っ込まれそうですね・・・）

森びとの活動は新しい節目を迎えましたが、ますます森びと的なものは必要とされていくと思います。そんな森びとイズムをこれからもこだまのように拡げていけたらと思います。「森の木魂（こだま）」をこれからもよろしくお願いします。

今年一年が、皆様にとって素敵な明るい一年でありますように。来年この号を作るときには、いつもの年のような活動ができていることを願って！（広報・小黑伸也）



森の木魂（こだま）創刊号（2021年1月24日発行）



発行：森びとプロジェクト

発行人：中村幸人

編集人：森びとプロジェクト編集委員

第二版

〒114-0013

東京都北区東田端 2-9-15 大木ビル 2階 201号

TEL&FAX 03-5692-4900

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info